

# みんなくりポジトリ

国立民族学博物館 学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

## The Cultural and Social Participation Strategies of Asian Migrant Professionals in Australia : Focusing on the Autobiographical Writings of One Writer and Her Cultural and Social Activities

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2016-03-22 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 石井, 由香 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.15021/00005971">https://doi.org/10.15021/00005971</a>

## オーストラリア・アジア系専門職移民の文化・社会参加戦略 —ある作家の自叙伝と文化・社会活動に注目して—

石井由香\*

The Cultural and Social Participation Strategies of Asian Migrant Professionals  
in Australia: Focusing on the Autobiographical Writings of One Writer and Her  
Cultural and Social Activities

Yuka Ishii

本論文は、カンボジア出身の華人系移民の第2世代で、弁護士、作家として活動するアリス・プンの自叙伝および編著書の内容とオーストラリア社会における反響、およびプンの文化・社会活動の分析を通じて、2000年代以降のアジア系専門職移民の文化・社会参加の状況を考察することを目的とする。アジア系専門職移民は、経済重視の多文化主義において「好まれる」移民である。しかし、「オーストラリア市民」であるアジア系専門職移民の中には、経済的のみならず、政治的、社会的にも主流社会に深く関わり、単純なマジョリティ、マイノリティの二分法を越えようとしている人々がある。本論文は、アジア系専門職移民にとっての多文化主義、またホスト社会へのアジア系オーストラリア人としての主体的な参加戦略の一つのあり方を、アジア系（カンボジア出身の華人系）というエスニシティ、ミドルクラス、若い世代という特質をもつ作家の事例から検証する。

This paper will consider the cultural and social participation of Asian migrant professionals in Australia since the 2000s through an analysis of Alice Pung's autobiography, *Unpolished Gem*, and a book that she edited, *Growing Up Asian in Australia*, also looking at the feedback to her books in Australia, as well as her cultural and social activities. Pung is a second-generation Chinese-Cambodian immigrant who is both a lawyer and writer.

---

\* 静岡県立大学 国際関係学部

**Key Words** : Asian Australians, migrant professionals, cultural and social participation, autobiography, Alice Pung

**キーワード** : アジア系オーストラリア人, 専門職移民, 文化・社会参加, 自叙伝, アリス・ペン

Asian migrant professionals are the ‘preferred’ immigrants in Australia under the policy of economically-oriented multiculturalism. As Australian citizens, they have been participating in the mainstream both politically and socially as well as economically, overcoming an oversimplified dichotomy between majority and minority. A broad variety of ethnic, class, and generational backgrounds can be seen among Australian immigrants and ethnic minorities. Not surprisingly, their recognition of and reaction to multiculturalism depends on their backgrounds.

The paper’s analysis examines Australian multiculturalism and the proactive participation strategy of Asian Australians in the host society from the perspective of immigrants of Asian (Chinese-Cambodian) ethnicity, particularly those who are middle-class members of a relatively younger generation.

1 多文化主義の「変容」とアジア系専門職移民の市民社会への参加の拡大	4 <i>Unpolished Gem</i> (2006) とオーストラリア社会の反応
2 オーストラリア文学におけるアジア系オーストラリア人の文学	5 編著 <i>Growing Up Asian in Australia</i> (2008) と移民の語りの「一般化」
3 アリス・プンの略歴と文化・社会活動	6 多文化主義の今後への示唆—結びに代えて

## 1 多文化主義の「変容」とアジア系専門職移民の市民社会への参加の拡大

オーストラリアは1970年代から政策的に多文化主義を導入した。しかし、現在この多文化主義の「変容」もしくは「危機」が指摘されている。関根政美は、これを「福祉主義的多文化主義」から「経済主義的多文化主義」への変容ととらえている。1970年代から80年代の福祉主義的多文化主義では、アジアをはじめとする非ヨーロッパ諸国・地域の出身者が増加し、インドシナ難民など経済的に厳しい状況で来豪する移民も多い状況のなかで、福祉国家の充実と並行して移民・難民定住者に定住・生活・社会参加支援プログラム、文化・言語維持促進プログラムが特殊主義的に実施されていった。また、多文化間相互理解・異文化間コミュニケーションプログラムも国民全体を対象として主流（mainstream）主義的に実施された。福祉主義的多文化主義は「多文化共生（Cooperation in Diversity）」の実現を目指すものであった。こうし

た政策は当時の歴代の労働党政権によって培われた（関根 1989; 2009）。

しかし、80年代の後半には、福祉主義的多文化主義への批判が強まり、経済主義的多文化主義の傾向が強くなっていく。経済主義的多文化主義は、移民・難民定住者に国益を利すること、主流国民との競争を求める。そこで求められるのは「多文化競生（Competition in Diversity）」である。福祉主義的多文化主義の実施に伴う社会的コストへの批判、社会が多文化化することにより主流社会の文化的統一性が損なわれ、社会が不安定化するとの懸念が「変容」の背景にある（関根 2009）。連邦政府の言説を分析した塩原良和は、これをネオ・リベラリズムの時代の多文化主義であるとしてとらえている（塩原 2005; 2010）。労働党政権下でもすでにそうした政策的方向性は表れていたが、1996年の連邦総選挙で初当選したポーリン・ハンソン（Pauline Hanson）上院議員およびハンソン議員が結成した極右政党ワン・ネイション党による多文化主義および移民政策批判は、福祉主義的多文化主義への一定層の国民の不満の受け皿となり、政治・社会的に重大な論争を引き起こした。そして、同年にジョン・ハワード（John Howard）が首相となり、ハワード自由党・国民党の保守連合政権の下で、これまでの多文化主義への批判に基づく経済を重視した移民政策が本格的に実施されるに至ったのである<sup>1)</sup>。政策の重点は、「当初の移民の権利運動に対応した福祉政策から、経済的見地からの文化的多様性の有効活用へと、明らかに移ってきて」（飯笹 2007: 170）いた。その後、2006年にハワードは総選挙で敗北し、ラッド（Kevin Rudd）を首相とする労働党政権が誕生、同じ労働党のギラード（Julia Eileen Gillard）政権を経て2013年には再び自由党・国民党の保守連合によるアボット（Anthony John “Tony” Abbott）政権となるが、政権党が交代しても、多文化主義への経済指向の姿勢に大きな変化はみられない状況にある<sup>2)</sup>。

多文化主義をめぐるこうした政策変容の一方で、アジア系の人口は増加をみた。アジアからオーストラリアへの人の移動は長い歴史を持ち、19世紀にはゴールド・ラッシュ時代に金鉱を目指して流入した中国人をはじめとして、日本人、インド人、シリア人など、相当数のアジア系居住者があったものの、1901年の移住制限法の制定以降、白人中心のいわゆる白豪主義の下で移民は基本的にヨーロッパからの白人に限られ、アジア系の受け入れはごく限られたものとなった（Yarwood 1964）。

しかし、1970年代以降、「肌の色を問わない」移民受け入れ政策がとられ、結果としてアジア系の移民が増加していった。まず、労働市場の需給関係から移民受け入れ数を絞る必要が生じ、移住希望者の年齢、教育水準、技能、職歴などの項目に付与されるポイントにより受け入れの可否を決める「ポイント・システム（Point System）」

が導入された。永住権を獲得したアジア系の人々は「家族呼び寄せプログラム (Family Reunion Program)」の最大の受益者となり、出身国などから家族を呼び寄せる者も多くみられた。そして、1980年代後半になると、オーストラリアは「ビジネス移民制度」により、一定金額を投資する移民に永住権を付与するようになった(竹田 1991: 39-48)<sup>3)</sup>。こうした政策により、ミドルクラスのアジア出身者の数が増加した。また、1970年代にはインドシナ難民も多く受け入れられた。難民も、「家族呼び寄せプログラム」を利用する人々であった(竹田 1991: 56-116)。この難民からも、オーストラリアで成功し、専門職等に就く人々が現れている。このようにして、ヨーロッパ系のみならず、アジア系も専門・技術的に、また階層的に多様化したのである(Jupp 2007: 31-33)<sup>4)</sup>。

経済主義的多文化主義は、主にミドルクラスのアジア系の人々を念頭に置いた多文化主義ともいえる。レバノン出身で、オーストラリア多文化主義研究を代表する研究者の一人であるガッサン・ハージは、経済的利益をもたらし、生産的多様性<sup>5)</sup>に貢献しうる移民は、白人にとって利用価値があり、搾取可能で管理できると(それが幻想としても)考えられる人々であるという(Hage 1998: 128-133, 邦訳 227-237)。経済価値のある文化的多様性を持つアジア系専門職移民は、さらに一般的に英語に堪能であり、社会的コストもかからない。この意味で、アジア系専門職移民は、オーストラリアにとって経済主義的多文化主義に沿う歓迎される移民であったと考えられる(石井 2009a: 1-6; 2009b: 71)。また、アジア系専門職移民が必要とする多文化主義も、福祉主義的な多文化主義ではなく、自身の文化的ルーツが主流である人々(アングロ・ケルティック系オーストラリア人)の文化と平等な価値を持つという文化的承認であるとハージは指摘している(Hage 2003: 108-110, 邦訳 169-173)。これは経済主義的多文化主義と合致するものでもあった。

その一方で、福祉を必要とする移民は経済主義的多文化主義では考慮されることが少なかった。ハージは、「問題は、労働者階級中心の多文化主義がオーストラリア社会から消滅しつつあり、そして、そうした労働者階級的多文化主義を駆逐するために、ミドルクラス多文化主義が利用されているように思える、ということなのである」(Hage 2003: 109, 邦訳 171)と述べている。塩原もまた、「『オーストラリア経済に貢献する』ミドルクラスの専門・管理職の人々」である「こうした移民とミドルクラスの多様性を礼賛する言説」を「ミドルクラス多文化主義」と呼び(塩原 2010: 95)、福祉主義的多文化主義を必要とし、経済的に貢献しない労働者・社会的下層の移民を排除する論理も持っているとは指摘した(塩原 2010: 83-122)。

しかし、それではアジア系専門職移民、ミドルクラスに属するアジア系移民のすべてが多文化主義のこうした方向性に同調していたのかといえ、必ずしもそうではない。多文化主義が変容の過程にあった2000年代に実施された調査では、オーストラリアのアジア系専門職移民（第1世代）のなかに、ホスト社会の一員としての意識とアジア系の文化、ルーツへの意識を両方とも保持した上で、アジア系オーストラリア人としてホスト社会への政治・社会「参加」を行う人々が現れていることが注目された（石井・関根・塩原2009）。ここでいう「参加」とは、各種のアソシエーション活動への関わりである（石井2009c: 100-107）。これはレイナー・パウベック（Rainer Bauböck）のアソシエーションの集積としての市民社会の定義を基礎としている。パウベックは市民社会を国家、市場、家族の三つの中核的な制度を頂点とする三角形として理念付け、各種のアソシエーションをこの三角モデルのなかに位置付けた。たとえば、企業は市場に、政党は国家に近く、友人サークルは家族に近い場所に位置づけられる（Bauböck 1996: 84-89）。企業など市場的性質の強いアソシエーションにおいて、アジア系専門職移民は一定の地位を得ている。しかし、適応にも問題がないと想定され、経済主義的多文化主義のなかで、移民として政策上受け入れが促進されるアジア系専門職移民は、その一方で依然として根強い差別、移民排斥運動にしばしばさらされる。

1990年代半ばのハンソン論争は、特に大きな影響をアジア系専門職移民にもたらした。社会負担になるから排斥されるのではなく、経済的に対等か対等以上の存在であるからこそ排斥の対象となると知ったとき、アジア系専門職移民の一部の人々は、アジア系オーストラリア人としてホスト社会に政治・社会参加を行い、貢献し、多文化尊重という価値観への参与を積極的に行う必然性をより強く感じるようになった。アジア系専門職移民の国家に近いアソシエーションへの参加といった政治的活動や、従来は家族に近かったエスニック・アソシエーションの、よりオーストラリア政治社会を意識した活動内容の変化に、こうした傾向が明らかにみられる（石井・関根・塩原2009）。

オーストラリアでの生活に満足し、特に政治・社会活動に関心を持たない「サイレント・マイノリティ」である人々も多く、こうした動きがアジア系専門職移民全体に広がっていると考えることはできない（石井2009b: 72-73, 89-90, 95-96; 2009c: 125-126）。また、こうした活動に携わる人々が自らが属するミドルクラス以外の労働者・下層移民のニーズを視野に入れていない面があるという指摘もある（塩原2009: 152-154; 2010: 130-133）。ハージが、移民コミュニティも自らにミドルクラス性の価値付

与をすることで自らが「労働者の権利の多文化主義」が消滅することの強力な根拠をなしており、「今日、このプロセスがもっとも進行しているのはおそらくアジア系コミュニティにおいてである」としていること (Hage 2003: 113-114, 邦訳 177-178) と、こうした状況は合致する部分がある。しかしその一方で、特定の移民の利益を実現するための単なるエスニック・ポリティクスではなく、日常生活で直面する、また政治的アリーナにおける (アジア系) 移民全般への差別や偏見へと対抗しようとする動きもまた萌芽的に見出されたのである (石井・関根・塩原 2009; 塩原 2010: 137-142)。

多文化主義が問い直される時代に、移民はどれだけホスト社会に主体的に参加できるのか、それにより、どのようにマジョリティー・マイノリティという二項対立を越えた価値観を醸成する可能性が生まれるのか。上記のアジア系専門職移民の活動は、やはりバウベックが指摘する、市民社会の文化的ディスコースに働きかける活動であるとも解釈できる。バウベックは三つの制度固有の文化的ダイナミクスに加え、市民社会内部の文化的ディスコースへの移民の参加を重視する。帰化した移民は平等な政治的権利を獲得するが、社会的、文化的には周縁化され、差別される。統合 (integration) が十全に達成された証拠として、移民の市民的アソシエーションへの参加や一般的な文化的ディスコースへの働きかけが重要となる (Bauböck 1996: 96-100, 113-123)。では、反移民的なディスコースが強まる中、この文化的ディスコースへの移民からのより直接的な働きかけは、具体的にはどのような形で可能なのか。ここで注目したいのが、アジア系オーストラリア人の芸術・文化である。

アジア系オーストラリア人、またアジア系オーストラリア人の芸術・文化への関心は、ポーリン・ハンソン論争以降の政治・社会環境のなかでアジア系をはじめとする人文学系の研究者の間で高まり、2000年以降、研究書、論文の出版数が増加している (Lo 2008: 19-20)<sup>6)</sup>。先駆的なテキストの一つとされる *Alter/Asians* (Ang, Chalmers, Law and Thomas eds. 2000) は、インドネシア生まれの華人という出自を持ち、カルチュラル・スタディーズの研究者でオーストラリア多文化主義の重要な論者の一人であるイエン・アン (Ien Ang) が2000年に出版した共編著であり、芸術、メディア、ポピュラー文化におけるアジア系オーストラリア人のアイデンティティについて検討している。アンはその序章において、この本はオーストラリアにおいて未だに公のディスコースを支配している「アジア/アジア系 (Asia/Asians)」対「オーストラリア/オーストラリア人 (Australia/Australians)」, 「我々 (us)」対「彼/彼女ら (them)」, 「こちら (here)」対「あちら (there)」という無用な絶対的二分法を批判的に打倒するものであるとし、アジア系オーストラリア人が多文化オーストラリアに不可欠な一

部分であることを前提として、新しくハイブリッドなアジア系オーストラリア人のアイデンティティが追及されたオーストラリアの文化生産（芸術、文化、パフォーマンスを通じて）のダイナミックな現場を考察することが本の主眼であることを述べている（Ang 2000: xvi）。アジア系オーストラリア人の文化的ハイブリディティについての認識は、やはり2000年の *Journal of Australian Studies* と *Australian Cultural History* の合同特集号である *Diaspora Negotiating Asian-Australia* でもアジア系の研究者をはじめとして共有されている<sup>7)</sup>。アジア系（Asian）というカテゴリー自体多分に政治社会的な背景を持っていること、その作品における内容やアイデンティティの部分については、すでに文学研究、文化研究の分野で分析が進んでいると言えるだろう。しかしアジア系オーストラリア人というアイデンティティを持つ作品が、オーストラリアのなかでどのように読まれ、共有されてきているのか、また作家がどのような意図を持って作品を生み出し、ホスト社会の文化的ディスコースに働きかけようとしているのか、作品や作家のホスト社会との関わりについて、社会学的な視点からの先行研究は、管見の限り、まだほとんどないように思われる。

本論文の関心は、こうしたアジア系オーストラリア人の作品が、また、特にアジア系オーストラリア人のオーストラリアでの生活や経験を描いた作品が、アジア系オーストラリア人の間での関心を越えて、どれだけオーストラリアのナショナルな文化的ディスコースで共有されている（あるいはされうる）のか、また共有されるためにはどういった場に訴えていくことが必要か、という点に関する「戦略」の社会学分析にある。この「戦略」の前提として本論文で参考にするのは、社会運動論の「フレーミング（framing）」と「政治的機会構造（political opportunity structure）」の概念である<sup>8)</sup>。社会運動は、通常「複数の人間が集行的に行う行為」（道場・成 2004: 4）であるが、アジア系オーストラリア人というカテゴリーは集成的カテゴリーであり、オーストラリアの政治・社会環境において政治的意味を持つものである。また、作家という個人の文化・社会活動であっても、社会のある側面、オーストラリアのアジア系移民および多文化主義をめぐる状況を何らかの形で変えることを意図した文化・社会活動が、ホスト社会という「政治・社会的場」をどのように認識して行動するのかを分析する上で、これらの概念の援用は有益であると考えられる。

社会運動論の著名な論者であるスノウとベンフォードは、フレームという概念を「人の現在および過去の環境のなかにある対象、状況、出来事、経験および一連の行為を選択的に強調し、コード化することで『外の世界』を単純化し、圧縮する解釈の図式である」とし、強調するという点に関して「社会的状況の深刻さや不正を強調し



たり潤色したりし、またこれまでは不幸ではあるがおそらく耐えられるとみなされてきたものを不当で不道德なことだと再定義する」(Snow and Benford 1992: 137)と整理している<sup>9)</sup>。先のイエン・アンの指摘にも明らかなように、オーストラリアにおいて、主流からアジア系移民、アジア系専門職移民が付与されてきたイメージ、負のステレオ・タイプ、多文化主義の変容と反移民的政治運動という問題に対し、「アジア系オーストラリア人」というアイデンティティ・カテゴリーを、その多様性を越えて打ち出していくことは、まず問題の所在を認識させる上で有用であろう。また、アジア系オーストラリア人の文化、経験が、オーストラリアの文化遺産、経験の一部としてその豊かさを担うものであるのだとする主張は、単にアジア系オーストラリア人、主流と非主流の二分法に問題を集約させるのではなく、オーストラリア全体の問題としての「多文化主義の在り方」、「多文化オーストラリアの多様性」の問題として、アイデンティティ・ポリティクスを越えて多くの人びとの関心を惹くことを可能にするフレームであるということができないのではないだろうか。また、そこでは、アジア系オーストラリア人がもつ文化的ハイブリディティや多文化主義および主流に対するまなざしといった、これまでのホスト社会におけるステレオ・タイプに対抗する内容が注目されていくことになる。

こうした内容を持つ芸術・文化作品は、しかし広範に読まれ、観られなければ、その社会的影響力は限られる。研究者や一部の芸術家、高文化を日頃から享受する人びとの間だけで鑑賞されるのにとどまらず、多くの人びとにアピールし、ホスト社会の文化的ディスコースに働きかけるためにはどのような手段が可能であるのか。ここにおいて、どのような「機会」を利用することができ、そこにいかに働きかけることができるのかが問われる。社会運動論では、「政治的機会構造」、すなわち社会運動に影響をおよぼす政治的環境<sup>10)</sup>が分析されるが、文化・社会活動においては、アジア系もしくは移民をとりまく政治・文化状況、文化発信・発表の場、文化作品の評価の場と市場、国家の文化政策、教育といった環境がいわば文化・社会的機会として存在していると考えられる。このフォーマル、インフォーマルな環境をどう認識し、働きかけていくのが、文化的ディスコースへの直接的な働きかけのためには重要であろう。

筆者はこうした観点から、本稿において華人系カンボジア人としての出自を持つアリス・プン (Alice Pung) というアジア系オーストラリア人作家により 2000 年代に出版された自叙伝 (autobiography) および編著とプンの文化・社会活動を分析したい。プンの作品と活動に注目するのは、プンが弁護士業の傍ら作家活動を行う専門職移民

であり、教育に関する社会活動も行うなど、意図的にアジア系オーストラリア人としてホスト社会および主流へ参加している事例だと考えるからである。そしてなによりも、ブンによる著書が、アジア系オーストラリア人のオーストラリアでの生活と経験を描いてオーストラリアの国民文化やアイデンティティを問い直すものであり、オーストラリアで反響を呼んだ試みだったからである。

文学の場合、アジア系移民の自叙伝、もしくは自伝的要素の強い小説が、これまでもなかったわけではない。しかしその多くはオーストラリアの出版流通網に広範囲に乗るものではなかった<sup>11)</sup>。しかも、後述するように、出版されたものもいわゆる「ボート」(boat)に類する話であり、出身国での本人、もしくは両親の困難な経験や、脱出の経緯が中心となるものだった。こうした語り市場を席卷する一方で、ホスト社会を自らの拠点(の一つ)とし、そこでの経験を紡ぐ著名人ではない「アジア系オーストラリア人」の自叙伝が出版され、それが一定の評価を得たことは、新しい動きであると評価できよう。この主流に訴え、幅広い読者を獲得したという点で、ブンによる自叙伝の内容と社会における評価、ブン自身の文化・社会活動の分析は、現在のオーストラリアの多文化主義を再考する上で、さらに移民の主体的な文化・社会参加の方法を探る上で、重要な視点を提示するものである。特に、文化・社会的環境、機会の分析という点において、移民の立場からとらえられる機会に何があり、どのようにその機会に働きかけが行われているのかをまず把握する作業として、ブンの文化・社会活動を見ていきたい。

また、アジア系専門職移民、アジア系オーストラリア人作家をみると、多文化主義施行期以降に来豪した者が多い第1世代のみならず、幼少期に来豪した1.5世代、もしくはオーストラリア生まれの第2世代が社会的に活躍し始めている。彼・彼女らは多文化主義の下で育った世代であり、第1世代以上に強くオーストラリアという「場」を拠点とするアジア系オーストラリア人として、これまでの多文化主義のあり方、これからの多文化主義を考える上で自らの生活経験を基礎に英語で表現、発言することができる人びとである。ブンも第2世代であり、この意味で、ブンによる自叙伝とブンの文化・社会活動の検討は、若い次世代のアジア系専門職移民の文化・社会参加の一つのケーススタディでもあるとも位置づけられよう。

本稿の分析対象となる作品はブンのデビュー作 *Unpolished Gem* (2006) と編著 *Growing Up Asian in Australia* (2008) である。ブンの文化・社会活動に関しては、アリス・ブンの二冊の著書およびブンのホームページの掲載内容、活動に関する各種インターネット情報、新聞記事、ラジオインタビュー、関連の文献資料を参照した。プ

ンの作品に対するオーストラリア社会における反応については、新聞、書評誌の書評、賞の受賞状況、研究書・論文における評価、出版社からの情報を主な分析対象とした。また、2013年8月にメルボルン、2014年9月にシドニーで先行研究および関連資料を収集し、2013年のメルボルン作家フェスティバル（Melbourne Writers Festival）にも参加し、情報を得た。この内容も分析の対象としている。

## 2 オーストラリア文学におけるアジア系オーストラリア人の文学

イギリスとの関係、また大量の移民の流入のなかで、「オーストラリア文学は、オーストラリア人とは何かを定義づけする際に、歴史的に重要な役割を果たしてきた」（ダリアン＝スミス 2008: 222）。「主流」であるアングロ・ケルティック系だけでなく、「非主流」であるヨーロッパやアジア、中近東からの移民、先住民族であるアボリジニが、自身の歴史、文化を反映させた文学作品を生み出すようになり、オーストラリア文学に「多文化文学（multicultural writing）」という新しいジャンルが現れた。ただし、非主流の移民や先住民族の作品がオーストラリアにおいて注目されるようになったのは、ようやく1990年代のことである。移民作家も、多文化主義の政策によって、自身のエスニシティに目覚めさせられたという面があるようだという（有満 2001: 58-60）。

移民を含むマイノリティの文学の隆盛に際して、連邦政府および州政府による作家や出版社への公的助成は、翻訳のみならず創作にも大きな役割を果たした（加藤 2005: 82, 93）。政府の作家活動への公的補助は、1960年代から増加し始めた。中心となった連邦政府機関は、1970年代以降の多文化主義下ではオーストラリア・カウンシル（The Australia Council for the Arts）である。連邦政府および州政府により、作家、出版社、雑誌、文学を発展させる組織やプログラム、各州の州都をはじめとして各地で開催されるアーツ・フェスティバルやライターズ・ウィークなどのイベントへの助成、文学賞の設立が行われている（Australia Council for the Arts 2015; Carter 2009: 377, 379-381; 加藤 2005: 93-94）。連邦・州の文化政策はマイノリティにとっても一定程度作品の発表にプラスになる文化・社会的機会となってきたと考えられる。少なくとも福祉主義的多文化主義の下では、こうした政府による助成の効果は、指摘される程度に大きかったということができよう<sup>12)</sup>。

アジア系オーストラリア人によるフィクション（小説などの創作）は、他の移民よりも比較的最近に来豪していることから登場が遅くなったとはいえ、おおむね1980

年代ないし90年代に現れ始めた(加藤2005: 89; 2006: 25; Broinowski 2003: 197; Ommundsen 2000)。この作家の多くが第1世代であり、それ以降の世代を持つ他のマイノリティに比べると、アジア系の語りには離国作家、ディアスポラ作家としての直接的な物語が多いとも指摘される(加藤2009: 187)。

しかし、最近の作品に関しては、従来とは異なる興味深い傾向が現れており、文学研究における関心も高まっている。たとえば、オーストラリア文学研究学会(The Association for the Study of Australian Literature)は2012年に学会誌で“Transnational Imaginaries: Reading Asian Australian Writing”という特集を組んでいる。この巻頭の紹介文で、ベンケ・オムンゼン(Wenche Ommundsen)は、アジア系オーストラリア人の文学作品が作品のカテゴリーとしては1990年代まで現れてはいなかったこと、文学研究で取り上げられるようになったのもここ10年ほどのことに過ぎないことを指摘している。しかしながら、アジア系オーストラリア人の独創的な作品の昨今の急激な開花は目覚ましく、それは決して驚くべきことではないと述べる。教育程度や言語(英語)に関して障壁がない移民が相当数おり、地球横断的なディアスポラの文化生産における「アジア・ブーム」に刺激を受けた第2世代、もしくは1.5世代の移民が文学シーンに登場しているのだとする(Ommundsen 2012: 1)。

オムンゼンはまた別の論文で、近年のアジア系オーストラリア人の著作に関し、「ポート」をモチーフにその傾向の考察を行っている。ブライアン・カストロ(Brian Castro)、アリス・ブン、ウーヤン・ユウ(Ouyang Yu)、ナム・リー(Nam Le)、シャウン・タン(Shaun Tan)、トム・チョウ(Tom Cho)らの作品がそこではとりあげられている。オムンゼンは「ポート・ストーリー」を「移住の前触れ、移住の道行、新しく異なる環境への統合の困難な過程に伴う激変、紛争、苦難のしばしばトラウマを伴う経験」であるとする。そして、最近のアジア系オーストラリア人の著作に見られる傾向は、言うなれば「ポート」に表象されるようなトラウマの語りの否定であるが、その一方で、パーソナル・ヒストリーにおける過去の(悲惨な)経験の独自の語りが見られるとしている。オムンゼンは、「アリス・ブン、ブライアン・カストロ、ナム・リーのポート・ストーリーを特徴づける、個人的およびナショナルな過去に対する、および表象の政治(the politics of representation)に対する深く相反する(ambivalent)態度は、多くの他のオーストラリア人作家とも共通する性質である」と述べている(Ommundsen 2011: 503-507)。

このようなアジア系オーストラリア人作家の作品が現れてきた背景として、オムンゼンは、(1)アジア系オーストラリア人の個人史の多様性、(2)1980年代以降のエ

スニック・マイノリティ文学もしくは多文化文学の、文学としての価値をめぐる論争、(3) 英語の、もしくは英訳された文学の国際市場での、アジア系のディアスポラ作品や、トラウマ、移動、文化的喪失の個人的もしくは文化的歴史、および文化的ルーツの探求を描いた作品の「ブーム」を挙げる。(1) については、アジア系オーストラリア人は、その出身国も、職業、階層も、世代もバラエティに富むことが指摘される。(2) は、特に1990年代のポーリン・ハンソンの台頭と呼応するかのようになり、アングロ・ケルティック系作家によるアイデンティティ偽装というデミデンコ事件<sup>13)</sup>とその影響により、多文化文学がさらに議論の対象となり、エキゾティシズムと文化的差異のマーケティング、オーストラリア文学や「よい文学」の定義、文化生産と文化的アイデンティティの間の容易ならぬ関係、批評と文学賞の作家と作品の奨励における役割、文化エスタブリッシュメントの政治など、あらゆる範囲の問題が再燃したとする。そして、この議論が沈静化すると、多文化主義とエスニックなもしくは人種的差異を、文学的経験を広げる明白な特質として論じることは難しくなり、2001年の難民危機で、世間の関心がアジア系マイノリティから中東からの難民や移民に移行したことを指摘する。(3) の「ブーム」については、アジア系の作家や多くのポストコロニアルな批評によって、欧米の聴衆に「周縁をマーケティングすること」は、文化的搾取と他者化 (othering) のコロニアル・パターンの再生産であると憂慮されたものでもあること、また、ユン・チアン (Jung Chang) の *Wild Swans* (『ワイルド・スワン』) の登場以降、ディアスポラの女性作品、「気取ったエキゾティックにゴージャスな女性が地獄の苦しみを味わう」話への欧米読者の期待が生まれている状況について述べている。オムンゼンは、こうした「アジア・ブーム」に付随するステレオタイプや表象の政治をアジア系オーストラリア人作家ほど強く拒絶した者はないとする。そして、プンの *Unpolished Gem* の冒頭の文章「この話はボート上で始まらない (This story does not begin on a boat)」がそれをまさに示していると論じるのである (Ommundsen 2011: 504-509)。

プンの著作は自叙伝、ノンフィクションに分類されるが、オムンゼンの議論において、小説などフィクションと同様に分析されていることは興味深い。オーストラリア文学の一部としての評価を示すものだからである<sup>14)</sup>。また、プンの第一作と編著の内容や文化・社会活動を見ると、こうしたアジア系オーストラリア人の文学が置かれた状況が一定の影響を与えていると思われる。特に、(2) と (3) の指摘については、ナショナルなアイデンティティ・ポリティクスのための、またグローバルな市場における消費の対象としての文化的差異という考え方に対する異議申し立てという点にお

いて、文脈は異なっても「文化的差異の都合のよい部分を切り取る」あり方への批判がそこに込められているのではないだろうか。

また、アジア系オーストラリア人の小説のなかには、経済主義的多文化主義への批判も含まれている。経済主義的多文化主義は、移民ないしはアジア系の文化を経済的価値からのみ見る危険を孕んだものであった。たとえば、天安門世代の華人系移民による文学作品を分析したレジーナ・リー (Regina Lee) は、ウーヤン・ユーの *The Eastern Slope Chronicle* (『イースタン・スロープ・クロニクル』) が、中国からの留学生である主人公が直面する壁 (白人対華人／アジア系) と、留学生である主人公の修士論文の指導教授が、自分が書こうとする本のために生の情報を得ようと主人公を受け入れるといった、搾取的で表面的なタイプの多文化主義を描写していると分析する。そして、この教授を、本稿でも前述したハージの言う「生産的多様性のディスコース」(Hage 1998: 128, 邦訳 227) に未だに支えられた白人オーストラリア人の態度と関連付けている (Lee 2008: 222–223)。マイノリティ対マジョリティの単純な二項対立は、経済主義的多文化主義において、むしろ強められることもある。

本稿の問題意識は、冒頭でも述べたように、専門職としての教育、実践経験と共に表現するリテラシーを獲得した移民が、どのような形でホスト社会に文化、社会的に働きかけを行い得るのか、という活動戦略の社会学的分析にある。自叙伝という形式は、フィクションでもデミデンコ事件で明らかになったように、フィクション以上に作者本人のもつ条件 (エスニシティ、階層、性別、世代、知名度など) が、作品の価値に直接投影されるという、著作の文学的価値という点では危険な側面も持つ。しかし、プンはそれも踏まえて、カンボジア難民であった華人系の祖母、両親と共にオーストラリアで育った若き女性として、作品を表し、文化・社会活動を続けており、経済主義的多文化主義のなかでの文化的搾取についても、アジア系オーストラリア人のアイデンティティを独自のやり方で取り上げることにより、搾取と単純な二項対立を退ける内容を持つのではないかと筆者は考える。次章では、プンの作品と活動の実際の内容を、他の作家と共有する意識も踏まえて分析する。

### 3 アリス・プンの略歴と文化・社会活動

プンは、自身の略歴、著作に関するインタビュー、書評など、自著の背景、自身の社会活動、自著に対する社会的反応に関する豊富なデータを自身の公式ホームページ (Pung 2015) にまとめている。その内容および著作における記述を踏まえて、まずプ

ンの略歴および活動について概観する。

プンは1981年、メルボルン郊外のフツクレイ (Footscray) に生まれ、ブレイブルック (Braybrook) で育つ。どちらもベトナム系を初めとするアジア系居住者が多い地域である (ABS 2011)。両親は華人系カンボジア人である。ポル・ポト支配下のカンボジアから両親はタイの難民キャンプに逃れ、そこで出会い、結婚した。母は難民キャンプでの生活中にプンを身ごもり、オーストラリア移住1カ月後に出産した。祖父はカンボジアで亡くなり、プンは祖母と両親、弟妹と同居し、近所に住むおばたちという三世同居の家族、また拡大家族的な関係のなかで成長していく。父はオーストラリアで最初は苦労したものの、後に電器店を経営するに至る。母も宝石細工の下請け仕事 (outworker) をしていた。プンはインドシナ出身者、非アングロ・ケルティック系 (主にアジア系) によって構成されるコミュニティを生活環境としながら、オーストラリアの学校教育を受け、アジア系オーストラリア人として育っていった。

メルボルン大学法学部を卒業し、弁護士 (lawyer/solicitor) となる。弁護士活動と並行して自叙伝 (autobiography) 形式の作品を執筆し、自らの子供時代から大学生活までを基礎とした第1作の *Unpolished Gem* (『磨かれぬ原石』) が出版されたのは2006年のことであった (Pung 2006)。この作品が好評を博し、プンは作家としての活動を広げていった。*Unpolished Gem* の後、プンは編者として *Growing Up Asian in Australia* (『オーストラリア育ちのアジア系』) を2008年に刊行した (Pung ed. 2008)。本書は50人以上のアジア系オーストラリア人の作品、語りをまとめたものである。2008年にアジアリンクの派遣作家 (writer-in-residence) として北京大学に滞在し、2009年には International Writing Program at the University of Iowa にも参加し、作家としての経験を着実に重ねている。本稿では直接の分析対象としないが、自らのオリジナル作品としての第2作 *Her Father's Daughter* (『父の娘』) は2011年に発表された (Pung 2011a)。さらに、2014年11月には、第3作として *Laurinda* (『ローリンダ』) が出版された (Pung 2014)。これは初めての小説である。著書以外にも雑誌や新聞に原稿を寄せており、時事問題への発言も行っている。

本稿の分析視角から興味深いのは、プンが、著書が評判となり作家として認められるようになってからも、弁護士の仕事を続けていることである。プンのホームページにおける自己紹介では、最低賃金および賃金平等の分野の法律調査者として仕事を続けているとある (Pung 2015)。さらに重要なのは、プンが教育に強い関心を示し、積極的に活動を行っていることである。のちに述べるように、プンは自身の著作が学校の教材として使用されることを歓迎している。また、自ら大学や学校に出向いて講演

を行うこともある。ホームページには、訪問を希望する学校が問い合わせ、予約をするための連絡先が記載されている。さらに、学校以外の組織やネットワークの教育関連の活動にも複数関わっている (Pung 2015)。プンは2011年9月のラジオインタビューで、「法律調査の仕事で週3日、水曜から金曜までパートタイムで働き、月曜と火曜に学校を訪問して生徒たちと話します。ときどき執筆します。」と語っており (Pung 2011b)、多方面にわたる活動を行っていることがうかがえる。

このそれぞれの活動の動機が、アジア系専門職移民としての文化を通じたホスト社会への関わりの前提として興味深い。まず、プンが弁護士 (solicitor) になったのは、父がメルボルンで経営する二つの電器店で、契約書を書く、物販法を理解するといった法の実践経験を早くから得ていたことが、おそらくその理由だろうという (Pung 2008)。また、両親の期待もあった。 *Unpolished Gem* では、11年生のプンを母が友人に紹介する際に、「私の娘は弁護士になるのよ」と言う場面が描写されている (Pung 2006: 136)。移民が経済的安定を確実に得るために、自身に、また子どもに専門性のある職を望むことはよくある。その意味ではプンのケースも、移民に特有の職業選好であろうが、両親はカンボジアの大虐殺から逃れてきたこともあり、子どもの安心、安定を望む傾向は常にも増して強かったようである (Pung 2008)。作家と弁護士の両立は、プンにとって現実的な選択であった (Pung 2007b)。しかし、弁護士として働き続けているのは、英語が十分に出来ず、オーストラリアの法律制度を理解することが難しい移民コミュニティの人々のために法を実践することに、移民コミュニティとホスト社会とをつなぐというやりがいも感じているからであろう (Pung 2007a)。

プンが作家になろうと思ったのは、個人的な資質として日常的に些細な、しかしおかしみのある話を見つけ出し表現する才能を、子どものころから発揮していたことがある (Pung 2008)。この資質は、プンの著作が多くの読者を獲得した大きな理由の一つであろう。しかし、それに加えて動機として重要なのは、それまでのアジア系作家の作品に、プンが物足りなさを覚えていたことだろう。プンはインタビューで、「私は、いかにみじめで抑圧されていると感じるのかということについての、アジア系の女性によるマニュアルを読むのにうんざりしていた」、「オリエンタル・シンデレラ・ストーリーや移民の成功の語りを読むことに飽きていた」とし、「自分は白人のミドルクラスになろうと切望する黄色人 (yellow people) についての本を書こう、と思った」と述べている (Pung 2008)。

プンの思春期に多数出版されていたアジア系の物語は、プンには指針とならなかった。プンにとっての「今、ここ」はメルボルン郊外での生活であり、そこでどう自分



自身が、そして家族が生きていくのが重要であった。難民として来豪したプンの祖母、両親が、カンボジアでの記憶、華人（潮州）系としての思考行動様式を保ち続ける一方で、オーストラリアでいい仕事を心得て稼ぎ、いい暮らしをしようとするたくましい意志と行動も、泣き笑いのおかしみが詰まった日常生活も、そういう「普通さ」はこれまで描かれてこなかった。悩み続けるプンにとって、自分が生きていく上での「モデル」となる話を見出せない中で、プンは自らをモデルとする作品を書き始めたのではないか。

シャンタル・ラクロワ（Chantal Lacroix）は、ドイツとイギリスの事例を対象に、国民統合政策における移民文学の位置づけを考察している<sup>15)</sup>。ラクロワは、統合を構造的統合および感情的統合の二つの次元に分けている。構造的統合は、個人と集団のより大きな社会への社会参加のあらゆる面（法的、政治的、労働、市民権など）を含んでいる。感情的統合は、価値観の方向付けやアイデンティフィケーションの過程に関わる。さらに、構造的統合は、経済的および社会的分野（sphere）に分かれ、感情的統合は社会的および文化的分野に分かれる。社会的分野は構造、感情両方の統合に関わり、経済的、社会的、文化的分野はお互いに影響を与え合う。構造的統合と感情的統合双方の、またこの2つの統合の相互関係を理解すれば、それだけ効果的な政策が実施できるとする（Lacroix 2010:12-16）。感情的統合は、文化的ディスコースとも重なるものであろう。

このうち文化的統合と社会的統合の両方に関わる指標の一つとして、ラクロワは「学校のカリキュラムにおける移民文学の扱われ方」をあげている。読書はホスト社会の主要言語の読み書き能力を向上させることにつながる。移民は、移動の経験に関するものを含む自身の集合的な生活経験を描写した本に鋭い関心を示す。あるイギリスのアジア系（British-Asian）の若手小説家は、自身の学校における経験についての問いに、第2、もしくは第3世代のイギリスのアジア系は今やインド人やパキスタン人などというよりもイギリス人であり、独特な自身の経験について読みたいと思っていること、インド人についてではなく、イギリスのアジア系の経験について読みたいと思っているのだと述べたという（Lacroix 2010: 114-115）。

こうした指摘はプンとオーストラリアで育った移民にも共通の関心であろう。もちろん、教育において移民の文学が果たす役割はそれだけではなく、いわゆる多文化教育的な意味合いにおいて、当該の移民以外の出自の生徒、学生たちにも移民文学は関心を持たれ得る（Lacroix 2010: 115）。プンが自叙伝を書き始めた動機として、「今、ここ」の話を描く必然はここにもあった。筆者は、これはプンが教育に関する社会活

動を行う動機にもなっていると考える。

また、教育に関わることは、階層を越えて本が読まれる契機を作ることにもつながる。小説や自叙伝は、「書かれた」ものを「読む」という「白人で知的中産階級」的な姿勢（white middle-class liberal attitudes）を要するものであるとの指摘がある（Lever 1998: 321; 加藤 2005: 82）。オーストラリアでも、英語で小説や自叙伝を読む層は基本的に知的中産階級（以上）の人びとであろうが、アジア系専門職移民もまた知的中産階級である。明らかにその一員であるプンが、自叙伝という手段を持って表現を行うことは、知的中産階級的な営みである。しかし、その「読者層」の限定を広げる上で、学校という場で多様な出自の生徒たちに働きかけを行うことは有効な手段であると考えられる。それに加えて、プンは自分の著作を教材とすることにも積極的である。プンは *Unpolished Gem* と *Growing Up Asian in Australia* の教授用ノートを自らのホームページに掲載し、自身の著作が世界でのみならずオーストラリアの高校および大学で教材となっていることを記している（Pung 2015）。実際、*Unpolished Gem* は 2009 年から 2014 年、また 2015 年から 2020 年の、ニュー・サウス・ウェールズ州の後期中等教育（高校）修了資格である HSC（Higher School Certificate）の英語における指定テキストリストに入っている（BOSTES 2007; 2014）。*Growing Up Asian in Australia* は、2010 年以降 2013 年まで、ヴィクトリア州の後期中等教育（高校）修了資格である VCE（Victoria Certificate of Education）の、Unit 3 および 4（12 年生）の英語（English/ESL）のコンテキスト・セクションの教材の一つとなっている（VCAA 2009–2012）。どちらの本も、学校のテキストとして、高校、大学で幅広く読まれていることは非常に重要である。

また、プンは自身の作家活動や教育関連活動の情報発信において、インターネットを主体的に活用している。すでに述べたように自分の公式ホームページ（Pung 2015）を持っているが、出版情報のみならず自著の背景についての情報、自著への書評、新聞等への寄稿原稿などマスコミにおける活動について、頻繁に更新を行っている。さらに、学校で自著を教材とする場合の教師向けのノートまで掲載している。プンの活動の多くはここに掲載されている。このホームページによる積極的な発信と対話の姿勢は、若い世代の専門職従事者であればほぼ確実に持っているだろうインターネット・リテラシーに支えられている。また、文化・社会参加において、マスコミ以外の意見表出手段の有効性を十分に意識してのことであろう。

#### 4 *Unpolished Gem* (2006) とオーストラリア社会の反応

アリス・プンの第一作、*Unpolished Gem* は、メルボルン郊外に生活するアリスとその家族を描いた自叙伝で、2006年にメルボルンの独立系出版社である Black Inc. から出版された。本書のタイトルは、古い華人系カンボジア人の諺「少女は綿のようなものである——一度汚れてしまえば、決して再びきれいになることはできない。少年は原石のようなものである——磨けば磨くほど、輝きを増す。(A girl is like cotton wool—once she's dirtied, she can never be clean. A boy is like a gem—the more you polish it, the brighter it shines.)」から来ている (Pung 2008)。磨かれぬ原石とは、すなわちアリスを意味しており、カンボジアに、そしてオーストラリアにも存在するであろうジェンダー意識との葛藤を示す (Ommundsen 2010: 196–197) タイトルでもある。

プンとその家族の生活は、アジア系移民コミュニティ内で営まれている。*Unpolished Gem* は、多くのオーストラリア人にとって、未知の多文化社会内のパラレル・ワールドとしてのアジア系 (華人系カンボジア人) の生活世界を知ることができる作品である。本書 (Black Inc. 版) の表紙には、メルボルン郊外と思しき住宅地を、オレンジ色の袈裟を着た仏教僧が托鉢をする写真が使われており、オーストラリアの日常としてのアジア (カンボジア) 系の生活上の営みを象徴する内容である。表紙の左上には、ピンクのうさぎのぬいぐるみを抱くプンと思われる洋服を着た女の子の写真が添えられている。

本書では、出生時の状況から大学時代の恋愛の話まで、プンの成長過程とそれを取りまく家族の喧騒が描かれている。メルボルン郊外のアジア系移民集住地域での日常生活のエピソードとして、父母や祖母のカンボジアでの経験や記憶、華人 (潮州人) としての文化や考え方が折々に述べられる一方で、プンや家族がオーストラリア社会で直面する問題も語られる。たとえば、英語を話せない母が、仕事場で、また英語を話す子どもたちに対して取り残された思いを抱き、コミュニティの英語クラスに行くものの、結局やめてしまう話や、プンが高校の卒業お別れパーティでエスニック・マイノリティとして感じた疎外感、大学時代に白人のオーストラリア人の彼と付き合い、家族の反応や、結局自分のエスニシティが好きだけではないのかという葛藤と考え方の違いから最終的に別れるまでの話は、代表的なエピソードであろう (Pung 2006)。

こうした記述は、プンが第二言語の英語で思考するオーストラリア人として、メル

ボルン郊外の狭い地域社会で成長する過程で、家族の記憶と文化を共有していく一方で、同時に内面化されているアングロ・オーストラリアンの文化や考え方とどう調整をつけて自己形成をしていくのかという、アジア系オーストラリア人に、そして移民に共通の文化的ハイブリディティの問題を表している。そして、オーストラリア人とは何か、という問いに、マジョリティー・マイノリティーの単純な二項対立ではなく、都市の地域社会レベルでの、そして個人の内面における文化的なハイブリディティこそがオーストラリアの現実の一端であることを改めて突き付ける。punは自分自身の精神的葛藤も余さず本書のなかで叙述しており、その姿は「学校でがんばって勉強し、弁護士という職を得た成功した移民」といった、格好のよいモデル・マイノリティーのそれでは決してない。叙述されるのは、移民第2世代の若い女性が現実にも悩み苦しむ姿である。

その一方で、祖母と母の対立、家族や親族とのいざこざなど、一般の家庭でもよくあるであろう家族の問題も巧みに描写される。さらに、ベトナム系やフィリピン系など、アジア系の多様な人びとが暮らすコミュニティ内での出来事も生き生きと叙述されている。しかも、本書は、深刻な経験を深刻に描くのではなく、日常生活に潜む深刻さと同時に滑稽さを注意深く観察し、豊富な語彙とユーモアによって、読者に訴える表現に仕上がっている。読む楽しみを喚起する諧謔的な作品であることは、本書の重要な特徴である。

本書はオーストラリアにおいて大きな注目を浴びた。主要紙や書評誌など数々の書評の対象となり<sup>16)</sup>、複数の文学イベントでもとりあげられた。本書は2007年のAustralian Book Industry Awardsの新人賞(Australian Newcomer of the Year)を受賞し、他にも多くの賞で最終候補となった<sup>17)</sup>。2012年には、National Year of Reading 2012のOur Story Project(National Year of Reading 2012)で、ヴィクトリア州の最終候補にノミネートされた(Landragin 2011)。これは連邦レベルのイベントプロジェクトの一つで、8つの州・準州それぞれのour storyを一般投票で決めるものである。結果は代表にはならなかったものの、オーストラリア文学のなかで認められ、一定の影響力を持つ作品となったことがうかがえる。すでに述べた通り、本書は学校や大学のテキストとしても読まれ、ニュー・サウス・ウェールズ州のHSCの英語における指定テキストの一つともなっている。こういった点で、若い世代の人々にも影響を与えうる作品であると言えるだろう。

また、本書はイギリスでPortbello社から2008年に出版され、2009年にはペーパーバック版も発売となった。アメリカでも2009年にPlume社が本書を発売した。イタ

リア語、ドイツ語、インドネシア語など翻訳も出版されており、国際的にも反響を呼んだ本となっている。

オーストラリア国内の書評を見ると、多文化社会オーストラリアの多文化社会の現実をアジア系オーストラリア人の視点で描いたものであることと、表現の豊かさについて、一定の評価がされている。ジュリエット・ヒューズ (Juliette Hughes) は、*The Age* に書評を寄せ、「これはとても鮮明な回想録で、そこからくるイメージがあなたの臉の裏にいつまでも残るほどだ」とその冒頭に記している (Hughes 2006)。パトリック・アリントン (Patrick Allington) は、*The Australian* に執筆した書評のなかで、同時期に出版されたボル・ポト時代を生き抜いた華人系カンボジア人の少女についての本と比べ、「*Unpolished Gem* はハイクラス作品であり、プンの語りはほぼステレオタイプ的にオーストラリアン (almost stereotypically Australian) だ」と指摘した。また、その表現について、「名人の話術」(virtuoso storytelling) であると称している (Allington 2006)。*The Sydney Morning Herald* に掲載されたブルース・エルダー (Bruce Elder) の書評では、プンはオーストラリアの多文化主義において、「稀なるバイカルチュラルな視点」(a rare bicultural vantage point on Australian multiculturalism) を提供し得るとし、「彼女は(母がほとんど英語を話さず、父が起業家精神にあふれ、レトロヴィジョンのフランチャイズを立ち上げ、カンボジア華人の文化がそのままの)彼女の家族の世界から、彼女の価値観が典型的にオーストラリアの子ども (Australian kids) である学校と大学へと苦も無く移行する」と述べる (Elder 2006)。アジア系オーストラリア人として、オーストラリアでの生活、経験を語るプンのバイカルチュラル、マルチカルチュラルな視点も評価されているのである。

本への関心の高さは、部数にも表れている。本書は、発売以降 2014 年 12 月までに 50,000 部強を売り上げている<sup>18)</sup>。この数字は、文芸書であることを考えても、良好な数字ととらえることができるだろう<sup>19)</sup>。本書のイタリア語版の翻訳者も、翻訳出版に関するプンとの対話のなかで、本書はオーストラリアにおいてベストセラー (bestseller) であると述べている (D'Arcangelo 2014: 1)。読者層の内実を正確にとらえるデータを得ることは難しいが<sup>20)</sup>、売り上げ、書評の内容、また前述の賞へのノミネート状況からすれば、アジア系の人々に、またアジア系の枠を超えて、広くオーストラリアの読者にアピールしたことがうかがえる<sup>21)</sup>。

書評の内容や賞へのノミネート状況、売上げから見ても、本作品は、アジア系オーストラリア人の新しい像を提示した作品として、文化・社会参加の上で成果を挙げたと考えられよう。それは、常に複数の文化の間で揺れ動きながら、オーストラリア人

として専門職を持ち、メルボルンという都市の地域社会を自分の「今、ここ」として生きていく姿である。プンの両親はオーストラリアで必死に働いた。また子どものプンも有名大学に行き、弁護士となった。それだけ見れば、難民の成功の一つの事例である。しかし、専門職としての地位を持ったプンは、自分の現実の生活を単純な成功譚に帰さず、多文化的な日常のダイナミクスとして英語で巧みに綴った。本書が経済主義的多文化主義の下でも、アジア系であるかどうかを問わず人びとの一定の支持を得たのは、オーストラリア人、オーストラリアの国民文化とは何か、という問いに対して、多文化的日常のダイナミクスから考えるという、手掛かりとなる内容をも含んでいたからであろう。

## 5 編著 *Growing Up Asian in Australia* (2008) と移民の語りの「一般化」

*Unpolished Gem* 出版の2年後、プンは *Growing Up Asian in Australia* (Pung ed. 2008) を上梓した。これは、アジア系専門職移民の経験の「一般化」を図る試みである。*Unpolished Gem* において、自身と自身の家族を描いたプンは、複数のアジア系専門職移民の語りを公にすることにより、アジア系オーストラリア人の存在と多様性を広く社会に訴えようとしたのである。プンは、準備したものの、最終的に本には載せなかったオリジナルの序文をホームページに掲載している。このオリジナルな序文が編著に掲載されなかった理由について、プンは序文の前の注で、出版業界で数十年のキャリアを持つ信頼する助言者から、このような「重い序文」は、一般書店のボーダーズで人々にこの本を手にとらせはしないだろう、と言われたことをあげている。それに続けて、「私がこの本で成し遂げたかったのは—真っ先に—私たちのポピュラー文化—私たちの共通の文化、私たちの日常の文化—に、アジア系オーストラリア人が私たちのナショナル・アイデンティティにいかにも不可欠であるのかということについての物語を浸透させることだった」と述べ、「これは、この本を主流の書店に置くことを意味した」と続けている (Pung 2009)。この文章には、アジア系コミュニティ内部で閉じ籠るのではなく、国民文化への影響を与え、主流に参入しようとする意図が明確に示されている。*Unpolished Gem* と比べて、オーストラリア社会への文化・社会参加への意欲がより強く反映された本であることが読み取れる。

この注に続くオリジナルの序文では、キャプテン・クックの来豪以降、オーストラリアの歴史書において、白人以外の人びと（華人）の叙述はひどいものであったこと

が述べられる。オーストラリアでは、ハワード政権下で、2007年10月より、市民権の取得にあたって市民権テスト（citizenship test）で一定の点数を獲得することが義務化された<sup>22</sup>。この市民権テストの2007年のガイドにおいて、連邦政府はこのような歪んだ表象に関して、植民者たちは人種間に違いがあると考えていたが、人種間の深い分断や、外国人ののけ者が低賃金で働き、すべての労働者の尊厳を貶めるような社会を望んでいたわけではなかったと説明している。しかし、白豪主義は終焉したが、多文化主義政策の下で育ち、私たちの新しい国歌——スコットランド移民によって作詞された——の歌詞を暗記した次の世代、よきオーストラリア人に懸命になろうとした私たちにとって、それはどのようなものだったかとプンは問う。そして、「モデル・マイノリティ」という言葉への疑問を投げかける。周縁化にもかかわらず成功を達成したアジア系アメリカ人を説明するために作られたこの言葉は、外見的な成功の指標（金、教育、名声、有形財）がマイノリティの価値を決定付けることを暗示し、主要な文化の理念や期待に移民が服従を示すことを要求するものである（Pung 2009）。

しかも、オーストラリアの文学史を通じて、アジア系はしばしばよそ者によってよそ者として描かれてきた、とプンは続ける。私たちの外から定義されるアイデンティティは、政治情勢によって、白人の国民性への重大な脅威と最も害のなさそうな従順な人種集団の間を揺れ動いてきたのであり、1996年に、激高した初当選の議員（ポーリン・ハンソン）は、自分の文化、宗教を持ち、ゲットーを形成し同化しない「アジア系により圧倒される」危機に我々は置かれていると宣言した。私たちは再び「危機を招く禍（Peril）」とされていたのである、と（Pung 2009）。

こうした記述には、プンが、経済主義的多文化主義のなかでの反移民的政治運動、市民権テストにおける政府による「公式」の答弁と現実との違いを意識し、アジア系オーストラリア人の実像を一般に知らせる必要を感じていることが明確に示されていると言えよう。しかもそれは「モデル・マイノリティ」としての像ではない。

出版された序文では、本書がアジア系オーストラリア人の著者たちによる自身の物語のアンソロジーであることが述べられ、本の概要が説明される。それぞれの章につけられたタイトルは、「オーストラリア英語」（Strine）、「開拓者」（Pioneers）、「保守的な労働者階級の人々」（Battlers）、「男友達」（Mates）、「家族」（The Folks）、「一族」（The Clan）、「伝説」（Legends）、「性愛」（The Hots）、「非オーストラリア人？」（UnAustralian?）、「出る杭」（Tall Poppies）、「家を出ること」（Leaving Home）、「帰郷」（Homecoming）と、アジア系オーストラリア人の経験と、オーストラリアの国民意識とを兼ね合わせた内容となっている。プンは、本書に収録された物語は、私たちに

オーストラリア育ちのアジア系がどのようなものかというだけでなく、アジア系オーストラリア人であるとはどういうことかを示すものであるとする。そして、これこそ自分が成長する際に読みたかった種類の本であると締めくくっている (Pung ed. 2008: 1-4)。

編者の意図を反映して、本書には 60 を越えるアジア系オーストラリア人の自身に関わる語りが収録されている<sup>23)</sup>。表現形式は、散文、インタビュー、詩、コミックなど多様である。著名人も含まれてはいるが、知識人、表現者ではない普通の人々の経験が多数語られている。エスニシティ、移民の世代、職業、年齢、性別、居住地といった、著者たちの特徴を正確に分析できる整合的なデータが示されているわけではないが、物語の内容と巻末の筆者紹介から見ると、その特徴は、ブンもいうように著しく多様なことである。東アジア、東南アジア出身の華人が約半数を占めるが、韓国、ベトナム、タイ、フィリピン、インドなどのルーツを持つ人びとも寄稿している。移民の世代としては第 1 世代から少なくとも第 4 世代までの人びとが含まれている。職業はマスコミ関係が多い。ただしそのなかには作家、詩人、コラムニスト、ジャーナリスト、編集者など活字メディアから、ニュースキャスター、フィルムディレクター、俳優、コメディアン、ロックシンガーといった映像メディアや舞台上で活躍する人までいる。マスコミ関係以外の職業には、政治家、医師、看護師、弁護士、IT 技術者、教師、レストラン経営者などがある。学生の寄稿も含まれている。複数の職業を掲げている著者も少なくない。ブンは、特に「出る杭」のパートに関して著者たちの職業の多様性に言及しており、アジア系オーストラリア人がほぼすべての職域で活躍していることを示しているとする (Pung ed. 2008: 3) が、全体として何らかの形で専門性が必要な職が多いこともうかがえる。年齢については明確に記載されていない場合が多いが、学生からすでに社会で名声を得ている者まで、年齢層も幅広いと考えられる。男女の性別はほぼ半々である。セクシュアリティに関して同性愛者という記述もある。居住地は、シドニー、メルボルン、キャンベラ、ブリスベン、パースなど、首都と州都が目につく (Pung ed. 2008)。

本書は、都市の専門職従事者であり、階層的にはミドルクラスに分類されるであろうアジア系オーストラリア人の、オーストラリアで成長する過程に関する形式、内容ともに多様な語りの集積である。ブンによる著者の選定基準は必ずしも明確ではない (Chung 2008: 43)。オーストラリアのナショナル・アイデンティティの中でアジア系オーストラリア人がどのように位置づけられるのかを体系的に考察した本ではない。結論があるわけでもない。しかし、この本の多様性の重視は、モデル・マイノリティ



として、または危害を加えるものとしてとらえられ、ホスト社会への経済的貢献のみが語られがちであった（専門職ないしはミドルクラスの）アジア系オーストラリア人の「本質化」を避ける方法でもある。また、本書は、オーストラリアの国民文化やナショナル・アイデンティティにおけるアジア系の位置づけを考える上での手掛かりになる材料を、学術的というより広く一般読者に流布しようとした試みであり、文化・社会参加の一つの形としての評価が十分に可能だと考えられよう。

この文化・社会参加の戦略という点で、パメラ・グラハム（Pamela Graham）が、本書の内容に関して興味深い考察を行っている。グラハムは次のように問う。

…21世紀初めにおけるオーストラリアのナショナル・アイデンティティの支配的な表象の再考を目的とする文化的介入（cultural intervention）として、本書がどのような働きかけをしているのかを私は検討する。アンソロジーの編者として、ブンが特定の文化的目的を達成するために本書で採用している戦略は何か？本書はオーストラリアのナショナル・アイデンティティの議論に介入するためにどのように子供時代の生活の語りを動員しているのか。  
(Graham 2013: 68)

これらの問いに対し、グラハムは本書の社会政治的な性質、もしくは外面（the form and packaging）という点から、グラハム・フーガン（Graham Huggan）が提示したアンソロジーの二つのタイプ、統合主義者（integrationist）と介入主義者（interventionist）を引用する。統合主義者の性質を持つアンソロジーの「主要な機能」は「ナショナルな文化アイデンティティの称賛」で、「対抗的というよりは融和的」であり、「再融和的な普遍主義の精神（spirit of reconciliatory universalism）」を持っている。介入主義者のアンソロジーは、「多様性の概念とネイションそのものの再構築についてはるかに批評的な見方をとる」と、グラハムはフーガンの表現を引用しながら説明する（Huggan 2007: 118; Graham 2013: 68-69）。その上で、グラハムは、ブンは *Growing Up Asian in Australia* において、この両方の要素を戦略的に用いているとする。このあいまいな位置づけが、純粋に介入主義者のテキストよりも、「融和的な」統合主義者のテキストのほうがよりアクセスしやすいと見る読み手に自書が届く方法をもたらすと述べる。また、文学的表象として、内面的には、子ども時代というテーマ選択が重要で、成人という普遍的な概念にアピールする一方で、文化的多様性の特有の表現を同時に許すものであると位置づけている。さらに、各著者によって用いられる父母や祖父母といった親族を引き合いに出した語り（relational narratives）、ユーモアも効果的であるとする（Graham 2013:68-78）。グラハムは、北米およびオーストラリアにおいて「過去30年以上にわたって、文学アンソロジーは、アイデンティティ

政治の議論に介入するためだけでなく、『国民文化』のある種の価値観を持った考えを動揺させるための生産的な道具として現れてきた」(Graham 2013: 69) ことを踏まえた上でこの指摘を行っている。本書の戦略的な意図の周到さは、こうした分析からも明確である。

アジア系オーストラリア人の芸術・文化のオンライン・マガジン *Peril* で 2010 年から 14 年まで編集長であり、現在は総合監修者 (editor-at-large) であるリアン・ロウ (Lian Low) も、またプンの主流に訴える戦略に言及している。2013 年の第 15 号に掲載された論説 “Not Another Asian Australian Anthology?” で、ロウは本書を「革新的な (groundbreaking) アンソロジーであると表現し、そのオリジナルの序文が「重すぎる」とアドバイスを受けた話に言及している。プンが「アジア系オーストラリア人がいかに私たちのナショナル・アイデンティティに不可欠であるのかということについての話」をポピュラー文化に浸透させるため、このアドバイスを戦略的に受け入れ、序文を編集したこと、その結果、プンが目的を達成したこと — *Growing Up Asian in Australia* が常に書店の棚に置かれていること、ヴィクトリア州の高校のカリキュラムに入ったことを述べる。しかしその一方で、プンの鋭い指摘を含むオリジナルの序文については、*Peril* 誌が 2009 年の第 8 号に全文掲載したことに触れているのである (Low 2013)。序文を本編には掲載せず、しかし人々の目に触れる場で公開することで、プンは「衝突」を回避しながらも、自らの主張を一般の人々に届ける柔軟な戦略をとったと解釈できよう。

本書も、新聞や書評誌でとりあげられた<sup>24)</sup>。しかし本書の場合は、読書界での評価以上に、学校でテキストとして広範囲に読まれていることがより重要であろう。先に述べたように、本書はヴィクトリア州の VCE の、12 年生の英語のコンテキスト・セクションにおいて教材の一つとなっている (VCAA 2009–2012)。ラクロウが言う文化、社会の両方の統合に関わる教育において本書が使われることにより、ナショナル・アイデンティティへの影響力を持つ可能性は高くなる。売上部数も、2014 年 12 月までで 6 万 5000 部弱と、*Unpolished Gem* よりも出版されてからの年数が短いにもかかわらず部数が多くなっている<sup>25)</sup>。研究者や評論家、また読書家以外の層に、この本は着実に浸透している。

本書のオリジナルの序文に付された小文には、本書の出版後のメルボルン作家フェスティバルのセッションの討論会で、プンが 300 人以上の高校の生徒と高校の先生の前で話をした経験が述べられている。そこでのある高校の先生からの質問が、オリジナルの序文を自らのホームページに掲載する契機ともなった (Pung 2009)。プンは

単にテキストとして使われることに留まらず、フィードバックの機会としてブック・イベントやインターネットを活用し、よりテキストを効果的に読むための教育現場、読者への関与を行っている。

本書では、その内容から、また出版後の対応において、オーストラリアの国民文化やアイデンティティに影響を与えようとする文化・社会活動としての戦略が明確にうかがえる。オーストラリア・ナショナリズムにおけるアジア系オーストラリア人という概念、存在を考えるための素材を提供し、メディアやイベントを活用し、学校という教育の場においてより深く読まれるための努力をする、というやり方は、*Unpolished Gem* の時以上に積極的な文化・社会活動戦略であると言えるのではないだろうか。

## 6 多文化主義の今後への示唆——結びに代えて

本書で検討したプンの自叙伝の出版、文化・社会活動は、ミドルクラスという経済的統合に関してはほぼ問題のない階層に属する移民の活動としての性質を持ちながらも、移民という枠と階層を越えて幅広い読者を得ようとする文化・社会参加の方法として解釈し得る。それは、第1世代とオーストラリア社会との橋渡しを行いながら、オーストラリアにおける「アジア系」としての経験と多様性を伝え、オーストラリアのナショナル・アイデンティティを形成する不可欠な一員としてのアジア系の多様な姿を公の議論に載せようとする、若い移民第2世代の試みであった。文化的ディスコースの形成や感情的統合に向けての働きかけであり、人びとの日常的な意識を緩やかに変えていこうとするやり方である。また、プンの文化・社会活動は、オーストラリアにおけるアジア系移民をとりまく文化・社会的環境を十分に意識した上で戦略的に行われている。本稿での分析により、多文化主義におけるアジア系オーストラリア人の政治・社会的位置づけ、主流の書店で販売されるための出版ルート、アジア系作家による文学作品の文学的評価と国内およびグローバル市場における価値、連邦政府および州政府の文化政策、教育カリキュラムにおける文学作品の位置づけなどに基づく環境と機会の存在が明らかとなり、この環境に柔軟に対応した形でプンが作品を発表し、文化・社会活動を行っていく様子が浮き彫りになった。そして、各種の賞の受賞やノミネート状況、(オーストラリア)文学としての評価、著書の売れ行き、学校教育のテキストとしての採用状況を見れば、プンの戦略は一定の成果をあげていると考えることができよう。

またそれは、これまでの多文化主義における取組みのなかで不足していた部分を少しでも埋めようとするものであり、2000年代の経済主義的多文化主義のなかで、移民の経済的貢献（のみ）に焦点を当てる政治に対する風潮への異議申し立てを含むものでもある。ブンはオーストラリアにおける多文化主義をめぐる動向に関して発言をしており、*Growing Up Asian in Australia* のオリジナルの序文でも示されたように、ハワード政権下の市民権テストの内容に関してブンは批判的であった。市民権テストの内容は、2009年にラッド政権の下で、多文化主義と先住民族、移民の状況をより多く盛り込んだりバラバラな方向へと変更された（関根 2011）。見直しを求める多くの声の一つに、ブンの自叙伝も広い意味で位置づけられよう。

今後のオーストラリアの多文化主義が、どのような方向に向かうのかは予断を許さない。しかし、すでにオーストラリア社会の一員であるアジア系移民が多数存在すること、バランスのよい統合を目指して政治・社会参加を行う移民の声を完全に無視することは、福祉主義的多文化主義下ではもちろんのこと、経済主義的多文化主義においてもできないであろう。

福祉主義的多文化主義は、移民に対する過度な経済的援助であり文化的差異を本質化するものと批判され、新自由主義の下で競争が奨励され福祉予算そのものが削減されるなかで衰退し、経済主義的多文化主義への変容をみた。経済的統合という面で困難を極めている移民は依然として多いが、統合そのものへの政治的コンセンサスが失われ、究極的に同化が統合であるとする経済主義的、もしくは新自由主義的「多文化主義」においては、経済を前提として文化的対応が問われた（関根 2009; 塩原 2005）。

しかし、移民国であるオーストラリアのナショナル・アイデンティティは、現在の成員と国際関係、グローバリゼーションに合わせた形での統合モデルが現在改めて模索される状況にある。そこにおいて、多様性を基盤とした形のナショナル・アイデンティティへの示唆を改めて提示するアジア系オーストラリア人である専門職従事者の文化・社会活動は、文化を前提として経済的対応へ、という戦略であるようにも見える。文化的多様性に関するコンセンサスができれば、それに対する経済的基盤と制度が当然必要になるからである。

中長期的に考えたとき、オーストラリアが多文化主義の旗を完全に降ろしてしまうことはできないと筆者は考える。しかし、これまでの多文化主義には、結局のところマジョリティとマイノリティ、白人と非白人、アングロ・ケルティック系の文化とそれ以外の文化、といった二項対立の枠にとらわれる部分があったのではないかと。

ローバリゼーションが進み、文化の混淆が至るところで起こり、欧米の文化を内面化したアジア系の人びとが多数生まれている現在、アジア系オーストラリア人作家の作品および文化・社会活動は、この二項対立の枠を越えた文化的多様性、ハイブリディティを前提とする多文化主義への一つの手掛かりを与えてくれるものであろう。

本稿ではその顕著な一例として、特に第2世代の新たな動きの一つとしてアリス・プンの著作と文化・社会活動をとりあげた。しかし、さらに検討が必要な課題があることも事実である。まず、文化・社会的環境と機会構造という点について、本稿でいくつかの機会の存在とそこへの働きかけの方法を指摘することができたが、これが他のアジア系オーストラリア人作家や移民作家にとっても同様の構造として存在しているのか、また、それぞれの機会間の関係と、歴史的な検討に基づく現在の構造の普遍性と特殊性について、応用可能なレベルでの提示をするには至っていない。この点については、機会構造そのもの、オーストラリアおよびグローバルな文化、文学をめぐる環境の詳細な考察が必要であらう。

また、若い世代のアジア系オーストラリア人作家たちの作品、文化・社会活動はそれぞれの方向性を持ち、多様であり、より多くの作家の動向を見ていく必要がある。アジア系以外のルーツを持つ非アングロ・ケルティック系作家の動向にも比較の視点を持ちながら注目する必要がある<sup>26)</sup>。さらに、アジア系作家の文学作品、文化については、カナダやアメリカなどの移民国でも研究が蓄積されており、アジア系オーストラリア人の文化・文学研究においても、これらの国におけるアジア系の人々の文化・文学との比較による研究がすでに試みられている<sup>27)</sup>。アジア系の人々の文化・文学はそれぞれのホスト社会の文脈において、さらにグローバリゼーションの時代において、文化的多様性の一翼をどのように担う存在となっているのか。こうした国際比較の視点も踏まえつつ、新たに現れている作家たちの動向、作品と文化・社会活動の多文化主義、またホスト社会における国民統合との関わりについて、今後さらに調査と分析・考察を進めていきたい。

## 注

- 1) 多文化主義の変容とハワード政権下の移民政策、多文化主義への対応については、歴史的経緯を踏まえた論考として関根（2009）のほか、飯笹（2007）、Jupp（2007）、塩原（2005; 2010）を参照。
- 2) 連邦政府の移民、多文化主義関連の事項を担当する省名の変化は、多文化主義への非積極的な姿勢の継続を示す一例であらう。ハワード政権下の2007年1月に、それまでの移民・多文化問題省（Department of Immigration and Multicultural Affairs）から、移民・市民権省

- (Department of Immigration and Citizenship) へと変更され、多文化という言葉がはずされた。この名称はラッドおよびギラード政権下でも変わらず、アボット政権下の2013年には移民・国境警備省 (Department of Immigration and Border Protection) へと、さらに変更が行われた。
- 3) 竹田いさみは、アジア系移民の増加に関し、オーストラリア政府がアジア系移民の受け入れを誘導的に行ったというよりも、ヨーロッパ系移民の受け入れメカニズムがもたらした副産物であると指摘している。アジア系移民の経済的効果を前向きに考えるようになったのは80年代後半の現象であり、1970年代以降の「ポイント・システム」「家族呼び寄せ制度」「ビジネス移民制度」の導入とその相互作用によって、結果としてアジア系移民の数が増えたのであるという(竹田1991: 39-48)。
  - 4) ジェームズ・ジャップ (James Jupp) によれば、1972年には定住目的の入国者の約10%が中東を除くアジア出身であったが、1984年にはこれが一時的に40%を超え、1991年には1年間だけで51%に達した。ジャップはまた、ヨーロッパ系と同様に、アジア系も専門・技術と生活機会によって多様化したこと、インド人、スリランカ人、シンガポール人、マレーシア人、香港華人、そしてそこまではないがフィリピン人、韓国人、台湾人、中国本土の中国人も、それほど労働者階級の人が多いわけではなく、南欧および東欧出身者のほとんどが労働者階級であるのとは異なる状況にあると述べている (Jupp 2007: 31-33)。
  - 5) 「生産的多様性 (productive diversity)」とは、キーティング (Paul John Keating) 労働党政権下の1992年の連邦政府多文化局主催の会議で初めて公に使用されたといわれる言葉である。オーストラリアの文化的多様性をいかに国益 (輸出競争力や市場の開拓) に結びつけるかという議論においてこの言葉が用いられ、多文化主義政策において重視された。そこでは、アジア地域の経済的重要性が認識されていた。生産的多様性は、ハワード政権においても引き続き多文化主義の基本的理念の一つとして用いられることとなった。(塩原2010: 95-97)。
  - 6) 2000年代以降のアジア系オーストラリア人の文学に関する主な研究書・論文としては、Ang, Chalmers, Law and Thomas eds. (2000) のほかに、Khoo (2003), Khoo ed. (2008), Khoo and Louie eds. (2005), Ommundsen (2000; 2010; 2011) などがあげられよう。
  - 7) 巻頭論文には“Hybridity and Racial Politics”という節があり、特集掲載の論文に言及しながらハイブリディティの指摘が見られる (Lo, Khoo and Gilbert 2000: 5-7)。
  - 8) 社会運動論におけるフレーミング、政治的機会構造論の位置づけ、解釈については、McAdam, McCarthy and Zald eds. (1996), 大畑・成・道場・樋口編 (2004), 曾良中・長谷川・町村・樋口編 (2004), タロー (2006), Tarrow (2011) を参照。
  - 9) Snow and Benford (1992) の引用部分の翻訳については、タロー (2006: 191-192) の訳を参考にした。
  - 10) 社会運動論の主要な論者の一人であるシドニー・タローは、政治的機会という概念を、ギャムソンとメイヤーの論文 (Gamson and Meyer 1996) を引きながら、「成功や失敗に関する人びとの期待に影響を及ぼすことによって集合行為への誘因を与えるような、政治的環境の一貫した (しかし必ずしも公式的、恒常的なものではない) ささまざまな次元のことを意味する」と定義し、その諸次元として、①アクセスの増大、②政治的提携の変動、③エリートの分裂、④影響力のある同盟者、⑤抑圧と促進、をあげている (Tarrow 2011: 163-167; タロー2006: 139-146)。
  - 11) たとえば、プリズベンの華人コミュニティをベースとして出版された Ling (2001), 研究者の手による Shen (2001) がある。
  - 12) ただし、2000年代に、ハワード政権の下で経済主義的多文化主義が強化されたことも一つの要因となり、アジア系オーストラリア人の小説の出版と販売促進活動にも厳しい状況が訪れたとの指摘がある (プロイノウスキー2011: 142)。
  - 13) ヘレン・デミデンコ (Helen Demidenko) というウクライナ名を持つ作家が執筆したウクライナの歴史を扱った小説が1994年に出版され、国内の重要な文学賞のほとんどを受賞したが、実はアングロ・ケルティック系の作家が執筆したことが判明したというアイデンティティ偽称事件であり、当時大きな論議を引き起こした (Gunew 1996; 有満2001)。
  - 14) オーストラリア文学としての評価という点では、Unpolished Gem は、The Cambridge History of Australian Literature でも、「アジアの表象 (Representations of Asia)」, 「自叙伝」の二つの章で、新しい動きとして紹介されている (Gerster 2009: 322; McCooney 2009: 340)。
  - 15) ラクローは、統合 (integration) を、一方的な同化ではなく、「ニューカマーと既存の社会の成員双方にとっての価値観、規範および行為における変化を含む適応の双方向過程」であ

- るとい定義を採用している (Lacroix 2010:7, 12)。マジョリティとマイノリティの双方向の変化という統合の定義は、移民の市民社会への十全な参加というパウベックの統合の定義と共に、文化的ディスコースとアジア系専門職移民の文化・社会参加を考える上で重要な定義であり、本稿でもこの定義を念頭に置いている。
- 16) 書評が掲載された新聞には *The Australian*, *The Age*, *The Sydney Morning Herald*, *The Courier Mail* など、書評誌には *Australian Book Review* がある。
  - 17) 最終候補となった賞には、プンのホームページの Books 欄によれば、*Australian Biography of the Year* and *Australian Book of the Year* in the 2007 *Australian Book Industry Awards*, 2007 NSW Premier's Literary Awards, 2007 Victorian Premier's Literary Awards, 2007 *Age Book of the Year Awards*, 2006 *The Colin Roderic Award*, 2007 *Westfield/ Weverley Library Award for Literature*, がある (Pung 2015)。
  - 18) 出版元である *Black Inc.* からの電子メールによる回答 (2014 年 12 月)。
  - 19) 「売れた本」のオーストラリアでの基準部数の目安としては、イアン・アーヴァイン (Ian Irvine) が自身のホームページに掲載している作家希望者への指南書「出版の真実 (*The Truth about Publishing*)」という文章のなかで示している部数が参考になる。アーヴァインはオーストラリアの海洋科学者として研究を続けるかたわら、国際的にベストセラーとなったシリーズ小説 *Three Worlds Cycle* や、児童書を出版している作家である。「レッスン 16: いずれにしても、いい売れ行きとは? (What's a good sale, anyway?)」のなかで、アーヴァインは、「オーストラリアでは、商業ペーパーバックでおよそ 2,500 部以上ならまあまあ (respectable) で、5,000 部ならよい (good) 売れ行きだ。A フォーマット (例えば大衆市場向けのペーパーバック) ならおよその数字は 4,000 部以上から 10,000 部以上といったところだ。一年で 20,000 冊以上売り上げる書籍は (すべてのフォーマットのなかで、フィクションのみでなくノンフィクションも) 200 冊以下だろう」と述べている (Irvine 2015)。ここであげられている部数からすると、プンの著書は、まずまずの売れ行きであると評価できるのではないか。
  - 20) *Black Inc.* からの電子メールによる回答 (2014 年 12 月) でも、読者層に関するデータは持っていないとのことだった。
  - 21) なお、筆者は 2013 年 8 月に開催されたメルボルン作家フェスティバル (Melbourne Writers Festival) の学校生徒向けプログラム (Schools' Program) における、アリス・プンのワークショップ "Identity: Yours, Mine, Ours" にオブザーバーとして参加した。7~10 年生向けのプログラムと VCE (11~12 年生向け) プログラムがあり、筆者が参加したのは VCE プログラムの方だった。会場は移民博物館で 1 時間 30 分のプログラムのうち前半は博物館の展示見学 (プンは帯同しない)、後半がプンによるワークショップだった。参加者は約 30 名で、二つの高校から参加していた。一つの高校は白人の生徒が多く、一つの高校は、ベトナム系などアジア系の生徒が多いようだった。ワークショップの内容はプンが本稿で取り上げた二つの著書を元にアイデンティティについて語るというものであったが、生徒たちは熱心に聞いていた。終了後も、アジア系と思われる生徒たちはそのままプンと歓談し、プンも熱心に応じていたのが印象的であった。運営スタッフにたずねたところ、その日の時間的に学校の授業時間に収まる午前中のプログラムは 50 名の定員一杯だったとのことであった。3 日間にわたって開催されたプログラムであることから、学校の生徒および先生からのプンの著作およびプンの体験への関心があることが推測される。
  - 22) 市民権テストは英語で実施され、20 題のコンピューターベースの選択肢問題からなる。合格には 75% の正解率が求められている。その内容は、申請者がオーストラリアおよびオーストラリア市民としての義務と権利について適切な知識を有しているかどうか、また英語の基本的な知識を有しているかどうかを判定するよう設計されているとされる (DIBP 2014: 4)。
  - 23) ただし、1 編はフィリピンから養子を迎えた白人系オーストラリア人女性による語りである。全体との整合性はともかく、オーストラリア-アジア関係が家族という社会の最小単位にも反映されている例だろう。
  - 24) 書評が掲載された新聞には、*The Age*, *The Canberra Times* など、書評誌には *Australian Book Review* がある。
  - 25) 出版元である *Black Inc.* からのメールによる回答 (2014 年 12 月)。
  - 26) 1980 年代、1990 年代には、非英語圏のルーツを持つ第 2 世代、第 3 世代の作家がオーストラリアで過ごした成長期の経験を描いた作品を発表していたと指摘される。「彼らの時代

になると、多文化主義はすでにオーストラリア社会に定着していたが、日常生活においては『文化的混淆』によって引き起こされる複雑で微妙な問題も存在した。自分自身がもはや移民と呼ばれる世代に属していない作家たちは、オーストラリア国内の、あるいはオーストラリアと海外とのあいだの文化の交わりについて、また過去や現在進行中の衝突や影響関係について追及する方向に向いている。(ダリアン＝スミス 2008: 225)。そのなかには、広く読者を獲得したことがうかがえる作品がある。たとえば、ブンは、*Unpolished Gem* で示したやり方は、すでに 1990 年代にイタリア系オーストラリア人作家メリーナ・マーケッタ (Melina Marchetta) が *Looking for Alibrandi* (『アリブランディを探して』) (Marchetta 1992) で先駆的に用いており、この著書は文学における新たなイタリア系オーストラリア人のアイデンティティの到来を告げるものであったと述べている (D'Arcangelo 2014: 3)。この本の主人公はシドニーに住むイタリア系オーストラリア人の 17 歳の少女が高校生活や家族関係で直面する現実とそれに立ち向かう姿を生き生きと描き出しており、オーストラリアで数多くの賞を受け、映画化された。アメリカなどオーストラリア国外でも出版され、複数の言語で翻訳版も刊行されている。マーケッタはオーストラリア生まれで、高校の教師をしながら最初の小説を書き上げた (現在は小説家専業で、ヤングアダルト小説の代表的作家の一人となっている)。自身のウェブサイトのブログページで、マーケッタも 2014 年 12 月にブンの新刊『ローリングダ』について好意的な感想を述べている (<https://melinamarchetta.wordpress.com/2014/12/> 2015 年 1 月 31 日確認)。また、ギリシア系オーストラリア人作家クリストス・チョルカス (Christos Tsiolkas) の小説 *The Slap* (『スラップ』) (Tsiolkas 2008) は、メルボルン郊外の多様な人々の日常生活を描き、オーストラリアにおいて、また国際的にもベストセラーとなり、テレビドラマ化もされた。チョルカスはギリシア系の第 2 世代であり、メルボルン大学を卒業後作家活動に入っている。本書は 2014 年末に邦訳が出版された。その出版刊行記念会で、チョルカスは、オーストラリアの現在の状況を描く、氏が誇りに思う作家として数名の名前をあげたが、その中にアリス・ブンの名前もあったことが印象的であった (クリストス・チョルカス『スラップ』刊行記念会、東京：代官山・ヒルサイドバンケット、2015 年 1 月 10 日)。訳者の湊圭史は、「訳者あとがき」で、現状のマジョリティ／マイノリティ間の緊張関係において、塩原が分析する「ミドルクラス多文化主義」から零れ落ちたまま浮かびあがれない人々の反感があるのではないかということ述べ、その一方で、「『スラップ』で描かれる民族間の関係は衝突を含みながらも、1990 年代までの多文化主義への期待を強く引き継ぎ、支持していると言えるだろう」と指摘している (湊 2014: 524)。こうしたアジア系以外の非英語系オーストラリア人作家の作品、活動と多文化主義との関係についても今後比較考察を進めていきたい。

- 27) アジア系カナダ人の文学とアジア系オーストラリア人の文学の比較を行った研究としては、Khoo (2003) がある。また、アメリカ、カナダ、オーストラリアのディアスポラの華人文学をとりあげた Khoo and Louie eds. (2005)、アメリカ、ドイツの状況などとの国際比較を行った論文を収録した Khoo (2008) も注目される。

## 文 献

- Allington, Patrick  
2006 *Unpolished Gem*. *The Australian*, 9<sup>th</sup> September 2006.
- Ang, Ien  
2000 Introduction: Alter/Asian Cultural Interventions for 21<sup>st</sup> Century Australia. In Ang, Ien, Sharon Chalmers, Lisa Law and Mandy Thomas (eds.) *Alter/Asians: Asian-Australian Identities in Art, Media and Popular Culture*. pp. xiii-xxx. Annandale NSW: Pluto Press.
- Ang, Ien, Sharon Chalmers, Lisa Law and Mandy Thomas (eds.)  
2000 *Alter/Asians: Asian-Australian Identities in Art, Media and Popular Culture*. Annandale NSW: Pluto Press.
- 有満保江  
2001 「多文化主義社会とマイノリティー文学——ヘレン・デミデンコ事件の場合」『言語文化』4(1): 57-88, 同志社大学言語文化学会。
- Australian Bureau of Statistics (ABS)



- 2011 2011 Census Quickstats: Footscray (State Suburb) and Braybrook (State Suburb). Canberra: Australian Bureau of Statistics (Internet, 1<sup>st</sup> July 2015, <http://www.abs.gov.au/websitedbs/censushome.nsf/home/Data>).
- Australia Council for the Arts  
 2015 Literature (Internet 1<sup>st</sup> July 2015, <http://www.australiacouncil.gov.au/artforms/literature>).
- Bauböck, Rainer  
 1996 Social and Cultural Integration in a Civil Society. In Rainer Bauböck, Agnes Heller, and Aristide R. Zolberg (eds.) *The Challenge of Diversity: Integration and Pluralism in Societies of Immigration*, pp. 67–131. Aldershot: Avebury.
- Board of Studies, Teaching and Educational Standards New South Wales (BOSTES)  
 2007 *English Stage 6 Prescriptions: Area of Study Electives and Texts, Higher School Certificate 2009–2014*.  
 2014 *English Stage 6 Prescriptions: Area of Study Electives and Texts, Higher School Certificate 2015–2020*.
- Broinowski, Alison  
 2003 *About Face: Asian Accounts of Australia*. Melbourne: Scribe Publications.
- プロイノウスキー, アリソン  
 2011 「共有された半球を書く——アジア＝オーストラリア小説の近年の動向」佐藤 渉訳 『立命館言語文化研究』23(1): 141–148, 立命館大学国際言語文化研究所。
- Carter, David  
 2009 Publishing, Patronage and Cultural Politics: Institutional Changes in the field of Australian Literature from 1950. In Peter Pierce (ed.) *The Cambridge of History of Australian Literature*. pp. 360–390. Port Melbourne: Cambridge University Press.
- Chung, Helene  
 2008 Writing from the Roots. *Australian Book Review*, July–August: 42–43.
- D’Arcangelo, Adele  
 2014 *Unpolished Gem/Gemma impure: The Journey from Australia to Italy of Alice Pung’s Bestselling Novel*. *Journal of the Association for the Study of Australian Literature* 14(1): 1–11. (Internet 1<sup>st</sup> July 2015, <http://www.nla.gov.au/openpublish/index.php/jasal/article/view/3106/3998>).
- ダリアン＝スミス, ケイト  
 2008 【解説】文化の混淆——現代オーストラリア短編小説と国家への帰属意識」有満保江訳, ケイト・ダリアン＝スミス・有満保江編『ダイヤモンド・ドッグ——《多文化を映す》現代オーストラリア短編小説集』pp. 221–230, 東京：現代企画室。
- Department of Immigration and Border Protection (DIBP)  
 2014 Australian Citizenship: Our Common Bond. (Internet 1<sup>st</sup> July 2015 <http://www.border.gov.au/Citizenship/Documents/our-common-bond-2014.pdf>).
- Elder, Bruce  
 2006 Unpolished Gem: A Rare Bicultural View on Australian Multiculturalism. *The Sydney Morning Herald*, 21<sup>st</sup> September.
- Gamson, William A. and David S. Meyer  
 1996 Framing Political Opportunity. In Doug McAdam, John D. McCarthy and Mayer N. Zald (eds.) *Comparative Perspectives on Social Movements: Political Opportunities, Mobilizing Structures, and Cultural Framings*, pp. 275–290. New York: Cambridge University Press.
- Gerster, Robin  
 2009 Representations of Asia. In Peter Pierce (ed.) *The Cambridge History of Australian Literature*, pp. 303–322. Port Melbourne: Cambridge University Press.
- Graham, Pamela  
 2013 Alice Pung’s Growing up Asian in Australia: The Cultural Work of Anthologized Asian-Australian Narratives of Childhood. *Prose Studies* 35(1): 67–83.
- Gunew, Sneja  
 1996 Performing Ethnicity: The Demidenko Show and its Gratifying Pathologies. *Canadian Ethnic Studies* 28(3): 72–84.
- Hage, Ghassan

石井 オーストラリア・アジア系専門職移民の文化・社会参加戦略

- 1998 *White Nation: Fantasies of White Supremacy in a Multicultural Society*. Annandale NSW: Pluto Press. (2003 保莉 実・塩原良和訳『ホワイト・ネイション——ネオ・ナショナリズム批判』東京：平凡社)
- Hage, Ghassan  
2003 *Against Paranoid Nationalism: Searching for Hope in a Shrinking Society*. Annandale NSW: Pluto Press. (2008 塩原良和訳『希望の分配メカニズム——パラノイア・ナショナリズム批判』東京：御茶の水書房)
- Huggan, Graham  
2007 *Australian Literature: Postcolonialism, Racism, Transnationalism*. Oxford: Oxford University Press.
- Hughes, Juliette  
2006 Unpolished Gem: Juliette Hughes Finds Pain and Comedy Running through Alice Pung's Migrant Story. *The Age*, 1<sup>st</sup> September.
- 飯笹佐代子  
2007 『シティズンシップと多文化国家——オーストラリアから読み解く』東京：日本経済評論社。
- Irvine, Ian  
2015 The Truth about Publishing. (Internet, 1<sup>st</sup> July 2015, <http://www.ian-irvine.com/publishing.html>).
- 石井由香  
2009a 「序章」石井由香・関根政美・塩原良和『アジア系専門職移民の現在——変容するマルチカルチュラル・オーストラリア』pp. 1-17, 東京：慶應義塾大学出版会。  
2009b 「『社交クラブ』を越えて——アジア系専門職移民のエスニック・アソシエーション活動」石井由香・関根政美・塩原良和『アジア系専門職移民の現在——変容するマルチカルチュラル・オーストラリア』pp. 71-97, 東京：慶應義塾大学出版会。  
2009c 「アジア系専門職移民の市民社会への統合——政治・社会参加を通じて」石井由香・関根政美・塩原良和『アジア系専門職移民の現在——変容するマルチカルチュラル・オーストラリア』pp. 99-128, 東京：慶應義塾大学出版会。
- 石井由香・関根政美・塩原良和  
2009 『アジア系専門職移民の現在——変容するマルチカルチュラル・オーストラリア』東京：慶應義塾大学出版会。
- Jupp, James  
2007 *From White Australia to Woomera: The Story of Australian Immigration (Second Edition)*. Port Melbourne: Cambridge University Press.
- 加藤めぐみ  
2005 「マイノリティの文学——小説と自伝を中心に」早稲田大学オーストラリア研究所編『オーストラリアのマイノリティ研究』pp. 82-96, 横浜：オセアニア出版社。  
2006 「オーストラリア文学とアジア」『オーストラリア研究』(18): 24-28, オーストラリア学会。  
2009 「多文化社会オーストラリアの現代文学」早稲田大学オーストラリア研究所編『オーストラリア研究——多文化社会日本への提言』pp. 185-201, 横浜：オセアニア出版社。
- Khoo, Tseen (ed.)  
2008 *Locating Asian Australian Cultures*. London: Routledge.
- Khoo, Tseen-Ling  
2003 *Banana Bending: Asian-Australian and Asian-Canadian Literatures*. Hong Kong: Hong Kong University Press.
- Khoo, Tseen and Kam Louie (eds.)  
2005 *Culture, Identity, Commodity: Diasporic Chinese Literatures in English*. Hong Kong: Hong Kong University Press.
- Lacroix, Chantal  
2010 *Immigrants, Literature and National Integration*. Basingstoke: Palgrave Macmillan.
- Landragin, Alex  
2011 Australia's Biggest Book Group. (Internet 1<sup>st</sup> July 2015, <http://www.wheelercentre.com/>)

- notes/a58eb77da249).
- Lee, Regina  
 2008 'Flexible Citizenship': Strategic Chinese Identities in Asian Australian Literature. In Tseen Khoo (ed.) *Locating Asian Australian Cultures*, pp. 213–227. London: Routledge.
- Lever, Susan  
 1998 Fiction: Innovation and Ideology. In Bruce Bennett and Jennifer Strauss (eds.) *The Oxford Literary History of Australia*, pp. 308–331. Melbourne: Oxford University Press.
- Ling, Chek  
 2001 *Plantings in a New Land: Stories of Survival, Endurance and Emancipation*. Brisbane: Society of Chinese Australian Academics of Queensland and Cathay Club.
- Lo, Jaqueline  
 2008 Disciplining Asian Australian Studies: Projections and Introjections. In Tseen Khoo (ed.) *Locating Asian Australian Cultures*, pp. 11–27. London: Routledge.
- Lo, Jacqueline, Tseen Khoo and Helen Gilbert  
 2000 New Formations in Asian-Australian Cultural Politics. *Journal of Australian Studies*, (65): 1–12.
- Low, Lian  
 2013 Editorial: Not Another Asian Australian Anthology?. *Peril*, Edition 15. (Internet, 1<sup>st</sup> July 2015, <http://peril.com.au/back-editions/editorial-not-another-asian-australian-anthology/>).
- Marchetta, Melina  
 1992 *Looking for Alibrandi*. Ringwood, Vic.: Puffin Books. (2013 神戸万知訳『アリブランディを探して』東京：岩波書店)
- McAdam, Doug, John D. McCarthy and Mayer N. Zald (eds.)  
 1996 *Comparative Perspectives on Social Movements: Political Opportunities, Mobilizing Structures, and Cultural Framings*, New York: Cambridge University Press.
- McCooley, David  
 2009 Autobiography. In Peter Pierce (ed.) *The Cambridge History of Australian Literature*, pp. 323–343. Port Melbourne: Cambridge University Press.
- 道場親信・成 元哲  
 2004 「社会運動は社会をつくる？」大畑裕嗣・成 元哲・道場親信・樋口直人編『社会運動の社会学』pp. 1–11, 東京：有斐閣。
- 湊 圭史  
 2014 「訳者あとがき」クリストス・チョルカス『スラップ』pp. 520–525, 東京：現代企画室。
- National Year of Reading 2012  
 2012 National Year of Reading 2012. (Internet, 1<sup>st</sup> July 2015, <http://www.love2read.org.au/nyr-2012.cfm>).
- Ommundsen, Wenche  
 2000 Birds of Passage? The New Generation of Chinese-Australian Writers. In Ang, Ien, Sharon Chalmers, Lisa Law and Mandy Thomas (eds.) *Alter/Asians: Asian-Australian Identities in Art, Media and Popular Culture*, pp. 89–106. Annandale NSW: Pluto Press.  
 2010 Writing as Cultural Negotiation: Suneeta Peres da Costa and Alice Pung. In Anne Collett and Louise d'Arcens (eds.) *The Unsocialable Sociability of Women's Lifewriting*, pp. 187–203. Basingstoke: Palgrave Mcmillan.  
 2011 'This Story does not Begin on a Boat': What is *Australian* about Asian Australian Writing? *Continuum: Journal of Media & Cultural Studies* 25(4): 503–513.  
 2012 Transnational Imaginaries: Reading Asian Australian Writing. *Journal of the Association for the Study of Australian Literature* 12(2): 1–8.
- 大畑裕嗣・成 元哲・道場親信・樋口直人編  
 2004 『社会運動の社会学』東京：有斐閣。
- Pung, Alice  
 2006 *Unpolished Gem*. Melbourne: Black Inc.  
 2007a 'Woman and the Law' Breakfast: 15 May 2007, the RACV Club, Melbourne. Victorian

- Women's Lawyers Association, Guest Speaker: Alice Pung. (Internet, 1<sup>st</sup> July 2015, <http://www.alicepung.com/writing/>).
- 2007b Meet the Author: Alice Pung-God of Small Things. Written by Deborah Bogle. *The Advertiser*, 22<sup>nd</sup> September.
- 2008 Interview with Alice Pung 2008. (Internet, 1<sup>st</sup> July 2015, <http://www.alicepung.com/for-teachers-and-students/>).
- 2009 Original Introduction to *Growing Up Asian in Australia*. (Internet, 1<sup>st</sup> July 2015, <http://www.alicepung.com/for-teachers-and-students/> and <http://peril.com.au/back-editions/edition08/the-original-introduction-to-growing-up-asian-in-australia/>).
- 2011a *Her Father's Daughter*. Melbourne: Black Inc.
- 2011b Alice Pung: Her Father's Daughter—The Book Show—ABC (Australian Broadcasting Corporation) Radio National, Interviewed by Anita Barraud on 13<sup>th</sup> September 2011. (Internet, 1<sup>st</sup> July 2015, <http://www.abc.net.au/radionational/programs/bookshow/alice-pung-her-fathers-daughter/3582976>).
- 2014 *Laurinda*. Melbourne: Black Inc.
- 2015 The Official Alice Pung Website (Internet, 1<sup>st</sup> July 2015, <http://alicepung.com/>).
- Pung, Alice (ed.)
- 2008 *Growing Up Asian in Australia*. Melbourne: Black Inc.
- 関根政美
- 1989 『マルチカルチュラル・オーストラリア—多文化社会オーストラリアの社会変動』東京：成文堂。
- 2009 「オーストラリア多文化主義の歴史的発展とその変容—共生から競生へ」石井由香・関根政美・塩原良和『アジア系専門職移民の現在—変容するマルチカルチュラル・オーストラリア』pp. 21–68, 東京：慶應義塾大学出版会。
- 2011 「ハワード・シティズンシップ・テストからラッド・シティズンシップ・テストへ—多文化社会オーストラリアのガバナンス」『法学研究』84(6): 31–76, 慶應義塾大学法学研究会。
- Shen, Yuanfang
- 2001 *Dragon Seed in the Antipodes: Chinese-Australian Autobiographies*. Carlton, VIC: Melbourne University Press.
- 塩原良和
- 2005 『ネオ・リベラリズムの時代の多文化主義—オーストラリアン・マルチカルチュラリズムの変容』東京：三元社。
- 2009 「『コストのかからない移民』?—アジア系ミドルクラス移民の社会福祉ニーズ」石井由香・関根政美・塩原良和『アジア系専門職移民の現在—変容するマルチカルチュラル・オーストラリア』pp. 131–158, 東京：慶應義塾大学出版会。
- 2010 『変革する多文化主義へ—オーストラリアからの展望』東京：法政大学出版局。
- Snow, David A. and Robert D, Benford.
- 1992 Master Frames and Cycles of Protest. In Aldon D. Morris and Carol McClurg Mueller (eds.), *Frontiers in Social Movement Theory*, pp. 133–155. New Haven: Yale University Press.
- 曾良中清司・長谷川公一・町村敬志・樋口直人編
- 2004 『社会運動という公共空間—理論と方法のフロンティア』東京：成文堂。
- 竹田いさみ
- 1991 『移民・難民・援助の政治学—オーストラリアと国際社会』東京：勁草書房。
- タロー, シドニー
- 2006 大畑裕嗣監訳『社会運動の力—集合行為の比較社会学』東京：彩流社. (Sidney G. Tarrow, 1998, *Power in Movement: Social Movements and Contentions Politics (Second Edition)*). Cambridge: Cambridge University Press.
- Tarrow, Sidney G.
- 2011 *Power in Movement: Social Movements and Contentious Politics (Third Edition)*. New York: Cambridge University Press.
- Tsiolkas, Christos
- 2008 *The Slap*. Crows Nest, N.S.W.: Allen & Unwin. (2014 湊 圭史訳『スラップ』東京：現代企画室)

VCAA (Victorian Curriculum and Assessment Authority)

2009–2012 *VCAA Bulletin*. No. 67, No. 78, No. 86, No. 94. (Internet, 1<sup>st</sup> July 2015, <http://www.vcaa.vic.edu.au/Pages/correspondence/bulletins/bulletinindex.aspx>).

Yarwood, A. T.

1964 *Asian Migration to Australia: The Background to Exclusion 1896–1923*. Melbourne: Melbourne University Press.